

## 研究誌『ことば』の12年

遠藤織枝

私達は、1977年6月、お茶の水女子大学国語国文学会における筆者の現代日本語の可能表現に関する研究発表をきっかけとして研究会をつくった。日本語に興味があり、日本語について研究したい人ならだれでも会員になれる実には大まかでゆるやかな会で、会の名前も初めはなかった。

はじめは、月に1度、あるいは2カ月に1度集まって順番に当たったものが自分のそのときどきの関心事をテーマに発表し合う会を続けていた。その会の場所を安くして便利なところを探すのも一仕事で、ある公立の会館を借りる際に会の名前が必要というので、その会場をとる当番の会員がとっさにつけた名称が「現代日本語研究会」であった。後で、名前が大きすぎて恥ずかしいとの意見も出たが、この名前なら何でも含まれるし、ウソをついているわけではない、また、他にこれに代わるいい名称も思い浮かばないという消極的な理由で現在にいたっている。

こうしてそのつど場所を変えながらの研究会を3年続けるうち、単にその場その場の発表で終わるのでは蓄積にならない、また会の中に向けてだけでは発展性もない、外に向けて発表する場にしようとの意見が出てきて、研究誌を発行することにした。

1980年12月に第1号『ことば』を刊行した。刊行のことばに記した「この会のメンバーは現在のところ、日本語の研究に関心をもつ女性の会員 — 留学生を含む — で構成されているが、その研究の対象は、日常の言語現象の実態を探ること、女性の視点から言語を把えてみること、言語表現の歴史の変遷を究明することなど、広範囲かつ多様である」の部分に会の概要は言い尽くされている。そしてこれは12年を経た今日でもそのまま生きている。

メンバーの何人かが在学中指導を受けた市川孝教授（現在お茶の水女子大学名誉教授）も「国語研究において、文献的言語を対象としたオーソドックスな研究もちろん重要であるが、それと同時に、身の回りの言語事実を凝視

して、そこに見いだされる課題を追究するという行き方も捨てがたい……その場合、既成の文体論や表現論などにあまりとらわれずに自由に発想し、大胆に構想すればよい。現代日本語研究会の方々に斬新で意欲的な研究の続行を期待したい。……今日のことばの問題は多くの人人の関心を集めている、……このような時節に『ことば』が女性の手になるユニークな研究として誕生した意義は決して小さくない」とのことばを寄せて激励してくださった。

主として女性の視点——ここでは、従来の男性の研究者が記述したことばの意味や用法が男性というフィルターを通して歪められているものがある、その男性のフィルターを外してみる見方——からことばをみる研究と、性差にこだわらず高校教師、日本語教師、日本語研究者としてそのときどきの研究テーマで論文をかくのと、この二つの流れがいつも共存して雑誌ができているが、前者の流れをたどってみる。

第1号で遠藤織枝が「女性を表わすことば」小林美恵子が「『女に道を聞くな』考」を発表した。遠藤論文の『岩波国語辞典第2版』の女性に関する語の採録、記述、用例などの考察から辞書に女性に公平でない扱いがあるとの指摘から、第2号では、辞書の種類をひろげ、考察対象をより詳細にしたいと7人の共同研究に発展した。その調査資料を用いて第3号にも2本の論文が発表された。

そのころ、京都に女性に関係する本だけを取り扱うウイメンズブックストア「松香堂」が開店した。その記事を新聞で知り、さっそく『ことば』1、2号を送って取り扱いを依頼した。その店頭で『ことば』を知った毎日新聞大阪本社の記者が取材に東京までやってきた。そしてその記事がきっかけで『国語辞典にみる女性差別』（三一書房、1985）が6人の共同執筆で出版できることになった。

また、84年の第5号には、その年第3版の改訂版が出された『広辞苑』についても同じような調査を試みて遠藤が「国語辞典研究 — 女のみでみた『広辞苑』 —」を研究し、商品科学研究所の論文募集に応募し、優秀賞を受賞した。それがマスコミの注目するところとなり、辞書が偏った目で見られていること、また、このようなことばの研究のテーマや方法があること

が社会に認知されるきっかけとなった。

第5号小林「『子育て』雑考 — 新聞投稿欄にみる『子育て』と『育児』 —」第6号「続『子育て』雑考 — 『子育て』と『育児』の20年」、遠藤「配偶者を呼ぶことば — 『主人』をめぐる」第7号「配偶者を呼ぶことば(2) — 夫から妻を」と、使う者の立場から、また呼ばれる者の立場から日常のことばを詳しく考察する研究が続いた。このような流れの中で、87年第8号で行った共同研究「ワープロ辞書を点検する」は、この年の商品研究大賞を受賞した。

9号で高崎みどりは「模索期の女性語」と題して現代語の中での女性語の意味、位置づけを文字どおり模索した。この模索は10号11号12号の共同研究「女性の話しことば」「男性の話しことば」「マンガにみる女子中高生の話しことば」へと続いている。

話しことば研究は、ことばの最も直接的・一義的役割を果たしている話しことばで、その機能・役割・意味などの実態の解明が求められているにもかかわらず、その場面、話者、話題、背景となる環境等々の多様性、個別性などからどこに対象の焦点を当てるかの難しさ、普遍妥当性との関連、などなどの制約と必要とする労力の大きさからあまりなされていない。

しかし、日常の言語現象に関心を抱くものとして、少しずつでもできることから解明していきたい、そうした研究の場としての「現代日本語研究会」と、その研究発表の場としての『ことば』のあり方がこしはらくは続きそうである。